

「地図豆」の地図を広げて街歩き

16 屋敷森と雑木林をもとめて三富新田を歩く（距離約9km）

【街歩きの概要】

埼玉県入間郡三芳町と同県所沢市に広がる三富新田は、自然とともに生きる農民生活の知恵が詰まった特徴的な田園地帯である。地図を広げて、そこに住む人々の生活と現在の土地利用などを実感しながら歩く。



通りから家屋までのアプローチは長く、緑多い

【道順】

東武鉄道東上線ふじみ野駅（バス利用）→八軒家バス停→八軒家の屋敷林→上長久保の雑木林→砂川堀→地藏堂→多福寺→多間院→神明社→島田家長屋門→六間道ケヤキ並木→旧島田家住宅→いぼ取り地藏→大石燈籠→中富の茶畑・屋敷林→中富バス停（バス利用）→西武鉄道所沢駅



雑木林まで続く耕作道

地図豆知識：三富新田の開発

江戸時代、それまで未耕地であった台地や扇状地の開発が盛んにおこなわれる。開発の背景には、社会の安定に伴う人口増とともに、土木・測量技術の向上もあったはずだ。

そして、灌漑用水の整備や農地整備のためには、関連した土木・測量技術とともに、豊富な資金が必要であった。事業主体には、幕府や藩などの官だけではなく、年貢の免除などで便宜が図られた農民や町民も含まれ、民間の技術も資金も利用して、各地で新田開発が盛んに行なわれた。

そうした時代、武蔵野台地の一角にある三富地域（「三富」の地名は開発入植後のもの）の土壌は、栄養分の少ない関東ローム層であって、用水にも恵まれない採草地としてしか利用価値のない地であった。三富新田の開発を担った元禄期の川越藩主であった柳沢吉保は、ここに道路を整備し、土地を区画することから始め、幅6間道（約11m）を縦横に開削し、道の両側に屋敷地（下図黄色）、耕地（黄緑）、雑木林（緑）からなる短冊状の土地を区画し、2年後の、元禄9（1696）年に事業を終えた。新田開発当初は、灌漑のための用水整備や深井戸の掘削も試みたが、これには失敗した。

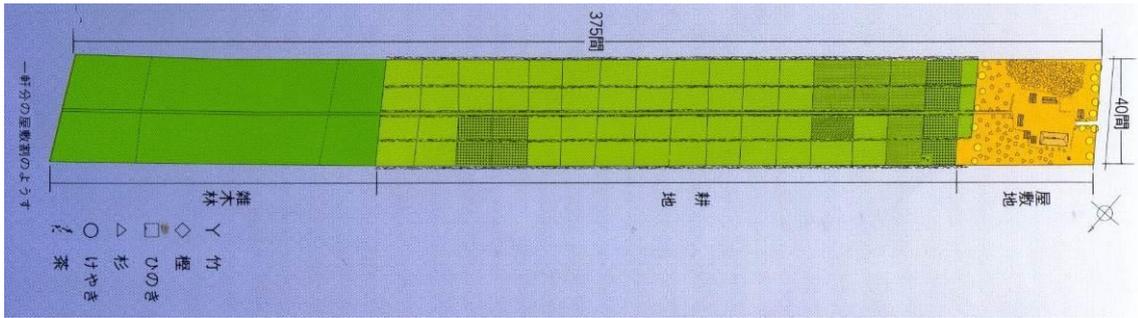
それでも三富開発が成功した鍵は、土地を計画的に区分利用する地割にある。

地割のようすは、現在の地図にもその模様があらわれていたように、六間道の両側に農家屋敷地を用意し、その一軒の農家ごとの畑とこれに続く雑木林の面積が均等になるように、屋敷地の背後に短冊型に並べたものである。そして、竹林や杉、ヒノキなどの計画的な植林によってできあがった屋敷林は、防風や防火の役割を持ちつつ、生産材は農具などに使用する竹細工の用材として生活用具や建築用材としても利用された。隣地との界には茶が植えられて、これも有効利用された。陸稲や麦、野菜の生産をする細長く区画された耕地の向こうに連なる再背後の雑木林には、ナラやエゴなどの落葉樹が植林されて、薪などの燃料として利用したほか、林で生産される落ち葉は、燃料や堆肥を生産する場として、日常的に手入れされ、活用されて、その後の土地改良に重要な役割を果たした。

農民たちは、こうした考え抜かれた仕組みの中で、収穫量を上げていったのである。

そのようすは、現在のように雑木林の一部が開発・利用される前、1945年以前の地形図を広げるとより明瞭に分かるだろう。高度成長の波は、この地にも少なからず影響を与えたが、それでも他所に比較すれば当時の地割のようすが色濃く残っていると見える。このことは、この地の再生産サイクルが永い間引き継がれ、成功したことを表現している。

三富新田の開発には、自然に対する優しさが随所に感じられる。自然とともに生きる農民生活の知恵が詰まったような三富新田は、現在「三富開拓地割遺跡」として景観保存されているから、地図を広げて、そこに住む人々の生活と現在の土地利用などを実感しながら歩いて見るといい。



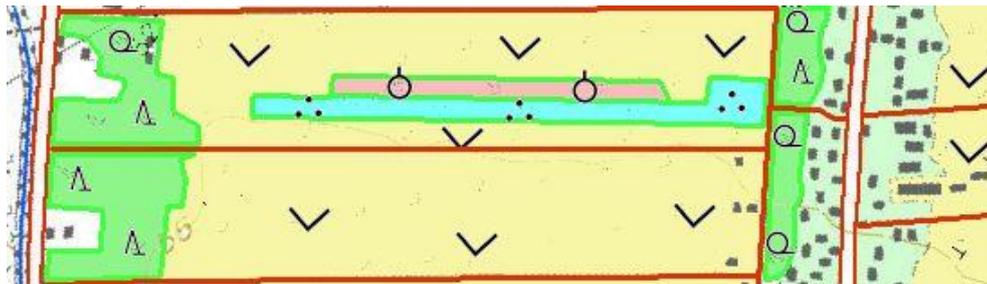
三富新田の地割モデル（「三富新田の開拓」三芳町立歴史民俗資料館より）

【街歩き解説】

① 上富八軒家から

ここ埼玉県入間郡三芳町と同県所沢市に広がる三富新田は、元禄期の川越藩主であった柳沢吉保が開拓した地として知られる。

武蔵野台地の一角にある三富新田の土壌は、栄養分の少ない関東ローム層からなる水利の悪い土地であった。その萱野を農業に適した土地とするために、開拓者はいくつかの工夫をした。はたして、どのような知恵を出して開拓したのか。まずは、現在の地図を広げてみる。



地形図を地物ごとに彩色した図

周辺には、工場や新興住団地、教育施設も見えて、当時のままでないことは明らかだが、現在の地図から、何がわかろうか。

まずは、地形と地物が織りなす特徴的な模様注目する。

三富新田の特徴の一つは、そのいずれの集落も幹線道路の両側に連なる「樹木に囲まれた居住地」で表現されていること。さらに、その背後には森があつて、しっかりとした屋敷森の存在が明らかである。

次に、家屋の裏手に広がる畑には、徒歩道などの幅の狭い農道が一定間隔で筋状に伸びていて、農地が短冊形に区画されていることが明らかである。地図の模様からだけでも、これだけのことがわかるが、土地利用図を作るように、広葉樹の森などを色塗りすると、

それが細長く伸びた畑地の先に広がっていることが一層明らかになる。これが、三つ目の特徴である。

屋敷地、耕地、雑木林と並ぶようすは、「三富新田の地割（図）」のとおりである。

そして、この地には田畑を潤す灌漑用水路がない。北西部に水路が見えるが、これが灌漑用でないことは周辺に田が広がっていないことで明らかである。

この程度のことを知ってから、東上線福岡などから路線バスで、八軒家バス停へ向かい、ここから、柳沢吉保の命で行われたという三富新田歩きをスタートする。三富新田は、「上富」「中富」「中富」の集落からなる。それぞれの名主と住民は、新田開発とともに周辺各村々から移住したのだという。

「八軒家」は、中富地区の最北に位置し、文字どおり八軒の入植者がいたという。

開発当時から六間（約11m）の道幅があったという「六間道」の表通りから、屋敷林を抜けて畑の畔道（耕作道）を通過して、雑木林まで歩いてみる。

地形図では、「樹木に囲まれた居住地」で表現される屋敷林には、ケヤキや竹などの木々の緑が屋敷を覆っていて、畑へ通じる小道から家々は見えないほどである。

ほぼ、各耕作者の区割りを示している屋敷林の先にある耕作道は、平行線を引いたように筋状に伸びている。

ただし、他の地域が直線的な区割りなのに対して、「八軒家」では曲線を描いて並行しているのはどうしてだろう。何の根拠もないが、既耕地との関係などの開発が認められた全体区画の形、それと連動する既存道路など動かし難い自然物があって、その形をうまく利用したのではないかと思われる。そうした工夫は、「八軒家」の南の「長久保」にも見える。

さて、地図の上ではその耕作道の両側に畑の記号が単調に並んでいるだけだが、耕作道の両側には、当然ながら多様な野菜類が植えられていることに注目しながら歩くといい。

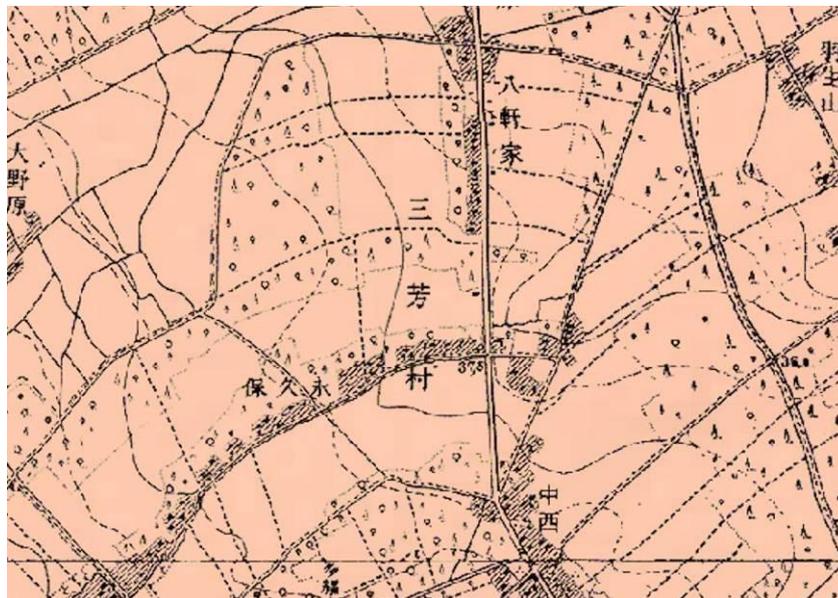
また、徒歩道や小型自動車道で表現される耕作道などの地図表現であるが、農道や林道では道路縁が曖昧であり、維持管理が行き届かないこともあるから、一般には多少ランクを下げて表現している。したがって、現地では地図表現以上に広い道幅に出会うこともある。しかし、三富新田のように特定の耕作者しか使用しない農道では、そのようなことは期待できないだろう。

その畑の中の耕作道をしばらく進んで後ろを振り返ると、「八軒家」のみごとな屋敷林を見ることができる。

歩いて見ると、道は思った以上に長く、中々終わらない。六間道から雑木林の端まではおおむね375間（562m）、1軒の間口は40間（約72m）あるのだという。やっとたどりついた、かつての武蔵野を思わせる雑木林は、堆肥などに利用する目的もあって、おもに落葉樹の林になっている。



八軒家辺り (1/25,000 地形図「川越南部」)



大正時代の八軒家辺り (1/50,000「川越南部」T10年測図)

道路の原形もそうだが、よく見るとおどろくほど、過去の土地利用形態がそのまま残っていることがわかる

② 雑木林の道から多福寺へ

屋敷林、耕作地の背後に広がる武蔵野かと思わせる雑木林には、作業用の小道があって落ち葉を踏みしめてかけ出したくなるような雰囲気がある。

林の中を抜けて、三富集落の菩提寺となった多福寺へと向かう。



砂川堀 雑木林の小道

道を横切る砂川堀は、平成になってから完成した、周辺都市の雨水排水を目的とした水路であって、農業用の用水路ではない。現代の技術をすれば、灌漑用水路も整備できたはずだなどと考えながら、緑に覆われた参道を経て多福寺向かう。

三富開拓地割遺跡の碑が建つ多福寺には、出入りはできないが荘厳さがある総門、そして鐘楼門形式の山門（文久3 1863年）、三富開拓に由来が刻まれた銅鐘（元禄）、おなじ元禄に掘られたという井戸、穀蔵（天保10 1839年）、（木の宮）地蔵堂（安永6 1777年）などがある。

地蔵堂裏には、「森の中の細道に夜な夜な追剥が出た。ところが、その正体は??？」と、「泥棒地蔵」という民話を紹介する立て札があって、のどかな雰囲気演出する。



多福寺地蔵堂



木ノ宮辺り

(1/25,000 地形図「所沢」「志木」)

③ 多福寺から多間院へ

多福寺から多間院へは、再び雑木林の中の小さな道を進む。

多間院毘沙門堂（明和3（1766）年再建）には、狛犬ならぬ狛虎が迎え、参拝者による「身代わり寅」がたくさん並んでいる。

開発当初の三富は、雑穀程度の収穫しかなく、農業経営は不安定であったが、その後上総国（現千葉県）からサツマイモが持ちこまれてから、安定したという。そのことを裏付けるように、多福寺となりの（木の宮）地蔵堂には青木昆陽を称える「甘藷先生頌徳碑」が、多間院となりには「いも神様」も祀られている。



多間院毘沙門堂の「身代わり寅」と六間道ケヤキ並木

④ 島田家長屋門から六間道ケヤキ並木

再び、六間道へもどる。多福寺前交差点には、三富開拓地の名主であった島田忠右衛門家の長屋門が残っている。同家は、立派な門を持つほどの格式をもっていた。

そして、このあたりからは、六間道を挟んだ「樹木に囲まれた居住地」の中には、ケヤキが並木状にあって、道の両側に延々と続いている。メインストリートの六間道から、屋敷森に囲まれた家々の間を抜けて耕作地へと延びる小さな道はとても美しい。

道沿いには、名産の川越イモや狭山茶を直売する店やイモ御殿と呼びたいほどの大きな屋敷がある。

⑤ 旧島田家住宅

六間道沿いにある旧島田家住宅は、文政年間（1818～1829）の建築と推定され、三芳町最古の建物だという。屋主の島田伴完は、屋敷を解放して「玉泉堂」という寺子屋を開き、多くの塾生を送りだした。1キロほど南へ進んだところに寺小屋跡碑があり、茅葺寄棟屋根造りの本住宅は、ここから移築復元された。



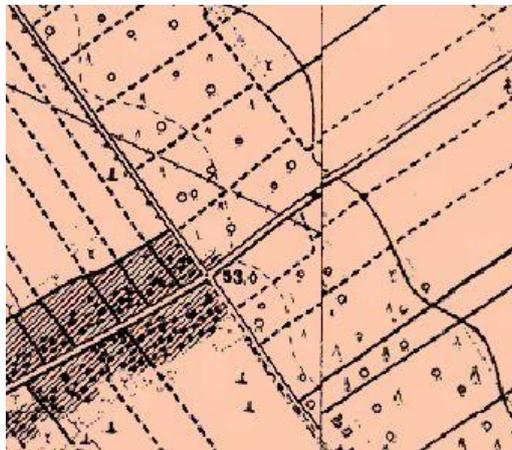
旧島田家住宅 イモを商う豪壮な家

⑥ 六間道ケヤキ並木から中富へ



中富辺り (1/25,000 地形図「所沢」「志木」)

短冊形になった土地は、地図記号でいうところの樹木に囲まれた居住地のほか、広葉樹林、畑や茶畑と果樹、そして広葉樹の雑木林で構成されている。区画ごとに墓地が存在していることも分かる



中富交差点辺り

(1/50,000「志木」S23年修正)

雑木林は広葉樹林であったことが明確だ
現地形図と比べると、その雑木林が開発されていることがわかる



上富から中富へ耕作地の中の小道を進む　　中富集落裏の農作業用道は美しい

六間道のケヤキ並木は、さらに南まで長々と続いている。

ここからは、天保4（1833）年建造の大石燈籠のある上富交差点近くの耕作地の中の小道をどこまでも進んで中富へ向かう。

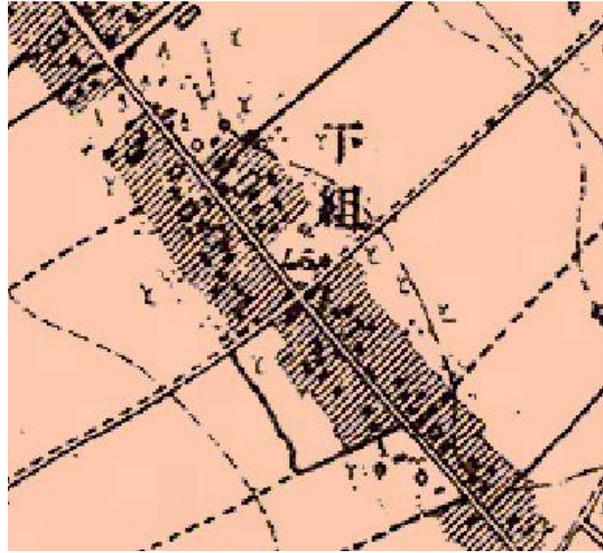
屋敷林の裏には、ここも茶畑やイモ畑が広がっている。そして、「中富」集落に出て、表通りとほぼ平行に走る集落裏の農作業用道を通ってみる。

地図に表現されているほどに直線的ではない集落裏の農道の片側は、屋敷林、反対側には畑、そのずっと向こうに雑木林があって、どこを切りだしても美しく、風情がある。

ここまで、屋敷林と簡単に書いてきたが、地図の上では、家屋と樹木が混在するある範囲までは「樹木に囲まれた居住地」で、その先は森林の記号で表現されている。そのことは、前出の「地形図を地物ごとに彩色した図」からも明らかだ。現地を調べても、明確な線など引かれてはいないが、前者は屋敷内の花木を含んだ樹木、後者がいわゆるケヤキや竹などからなる屋敷林といったものを表現している。

そして、これも1945年以前の地形図で顕著にみられるのだが、作業性のためを考慮したのだろうか、茶畑や桑畑は屋敷（林）のごく近くに集中しているのがわかる。現在でも茶畑は同じ傾向にある。

先人の知恵を感じる三富新田めぐりは、楽しい屋敷林裏の小道から中富バス停へ出て、所沢駅へ向かって終わる。



中富集落の茶畑

(やや不鮮明だが) 屋敷林の近くには茶畑や桑畑が広がっていた
(1/50,000「志木」S23年修正)

**** オフィス 地図豆 yamaoka mitsuharu ****